

お水は供えてはいけけないの？

お仏壇に、茶湯器や一般のコップを使って水を供えている方がいます。これはほとんど習慣的なもののように「毎日欠かしたことがありません」と、自慢げにおっしゃるおばあさんもいます。「なぜ水を供えるの？」と聞くと「仏さまのどが渴かれるでしょう」とのご返事。どうも、水を供えるのは「仏さまや亡き人のどを潤すため」と思っているようです。



華瓶（上）と茶湯器（下）

亡き人を思い、その心に触れる行為なのでしよう。しかし、亡き人が生まれた仏さまの浄土には「八功德水」というとっておきの水がふんだんにたたえられてあり、私たちが「水道」の水を差し上げる必要はないのです。さらに、こうした「のどの渴きをいやすため」という行為は「追善」の意味に受けとりがちで、仏さまのお心にはそぐいません。

ですから、浄土真宗では茶湯器やコップを使って「仏さまや亡き人に飲んでいただく」ような水の供え方はしないのです。お茶も同様のことです。

とは言っても「水そのものがいけない」というわけではありません。水は、私たちの生活に欠かせない貴重な自然の恵みです。この尊い水を仏さまの恵みと味わい、生かされていることへの感謝から仏前に供えるならば、それはりっぱな報謝行でしょう。そういう報恩の思いからお水を供えるために、華瓶という仏具を使います。仏事には一定の作法があり、ご飯（お仏飯）を供えるにはお茶碗ではなく仏飯器を用いるように、お水を供えるには茶湯器でなく、華瓶を用いるというわけです。

具体的には、華瓶一对に水を入れ、櫛または青木を生け（色花は用いない）、上卓に置きます。櫛を生けるのは香木だからで、つまり香水として供えるのです。仏さまの恵みを浄らかな香水にして供えるところに敬意と感謝の心が込められていると言えますでしょう。

なお、華瓶がなければあえて供える必要はなく、お茶も供える必要はありません。

ポイント

- ▶ 茶湯器で水やお茶は供えない
- ▶ 水は華瓶に入れ、櫛を生けて供える